

《原 著》

急性心筋梗塞における左室壁運動改善の予測

亜急性期の ^{99m}Tc -tetrofosmin, ^{123}I -BMIPP 心筋 SPECT を用いて

秋 元 奈 保 子*

要旨 急性心筋梗塞亜急性期に施行した ^{99m}Tc -tetrofosmin (TF), ^{123}I -BMIPP 心筋 SPECT 所見から慢性期心機能改善予測の可能性について検討した。対象は発症 24 時間以内に再灌流療法に成功した急性心筋梗塞 18 例。発症約 2 週間後に tetrofosmin (早期像と後期像), BMIPP (早期像) を撮像し, 梗塞領域の regional defect score (RDS) を半定量評価, 左室造影から得られた局所壁運動の指標である SD/chord と比較した。TF 後期像, BMIPP 像の RDS と亜急性期の SD/chord (TF: $r = -0.592$, $p = 0.011$, BMIPP: $r = -0.643$, $p = 0.004$) および慢性期 SD/chord (TF: $r = -0.491$, $p = 0.037$, BMIPP: $r = -0.599$, $p = 0.007$) の間に有意な相関がみられた。急性期から慢性期にかけて SD/chord が有意に変化した 9 例の SD/chord 改善度と, TF の逆再分布度および BMIPP と TF の乖離度との間にも有意な相関が示された (逆再分布度: $r = 0.735$, $p = 0.022$, 乖離度: $r = 0.691$, $p = 0.037$)。以上より, 亜急性期においても逆再分布度や乖離度を併用することで慢性期心機能改善の予測が可能であると考えられた。

(核医学 37: 291-301, 2000)